

Title	市民社会における〈ラルシュ〉共同体運動の意義 : 「権利」と「祝祭」
Author(s)	寺戸, 淳子
Citation	宗教と社会貢献. 2018, 8(1), p. 55-73
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68257
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

市民社会における〈ラルシュ〉共同体運動の意義

—「権利」と「祝祭」—

寺戸淳子*

The Impact of l'Arche Community on Civil Society
Rights and Celebration

TERADO Junko

論文要旨

本稿では、知的な障害がある「メンバー」と「アシスタント」が共同生活を行う〈ラルシュ〉を取り上げ、現在世界37か国に宗教宗派を問わない「祈りの共同体」を展開するこの運動、特にその「人間の弱さ（貧しさ）」とそれによって引き起こされる「暴力」をめぐる活動理念が市民社会でもつ意義について、エヴァ・フェダー・キテイの「依存労働」と「権利」を巡る議論を参照しながら考察する。

キーワード 市民貢献活動、共同体、依存関係、暴力

This paper explores l'Arche Community, an international federation that has expanded into 37 countries, dedicated to the group-home movement, where people with and without learning disabilities live together as a “community of prayer” regardless of religious affiliation. The paper examines the possible impact of this movement on civil society, especially the influence of its message concerning “human weakness (poverty)” and violence it evokes, with reference to Eva Feder Kittay’s argument about dependency.

Keywords: civic service, community, dependency, violence

* 専修大学兼任講師 jdotera@hotmail.com

1. ラルシュ共同体運動

〈ラルシュ〉共同体（「L'Arche」はフランス語で「ノアの箱舟」を意味する）とは、知的な障害がある人（以下「メンバー」と記す）とアシスタントが「ホーム」で共同生活を行う共同体運動である。1964年にカナダ出身の男性ジャン・ヴァニエが、パリ北東のトロローリー・ブルイユ村で二人の知的な障害がある男性と一軒家で暮らし始めたことに端を発し、2017年には世界37か国に152の共同体を数える国際ネットワークを形成している。カトリック信仰に基づいて創設されたが、現在は宗教宗派を問わない「祈りの共同体」という理念を掲げ、国・地域はもとより一つの共同体のホーム内でも多宗派・多宗教状況となっている。本稿では、この共同体運動と市民社会の関係、および、ラルシュにおける「人間の弱さ」をめぐる活動理念が市民社会でもつ意義について考察する。

（1）ラルシュの歴史と組織

創設者のジャン・ヴァニエ（1929-）は、外交官で後に第19代カナダ総督となるジョージ・ヴァニエの息子として、敬虔なカトリックの家庭で育った。第二次世界大戦勃発を機に13歳でイギリス海軍士官学校に入学し、戦後はカナダ海軍士官となったが、神の国と平和に仕える道を求めて20歳で除隊^①、その後さまざまなキリスト教系共同体運動に参加し、この間、生涯の師となるドミニコ会士のトマ神父と出会う。その後、1962年にパリ・カトリック学院で哲学の博士号を取得し、トロント大学で哲学講師を務めていたとき、障害者施設の施設付き司祭になっていたトマ神父のもとを訪れ、生涯施設を出ることがないという障害者の境遇を知り、彼らに「家庭」を提供したいという一念から共同生活を始めた。そして1965年、経営危機に陥ったこの施設の経営を請われて引き継いだことで、ヴァニエの個人的な行為は福祉行政の対象へと変化したのである。当初から、自らの活動の本拠地で家族も暮らしていたトロントの友人・知人・学生の支援を受け、1969年にはフランス国外初の共同体がトロントに設立された。1970年にインドに共同体が生まれると、欧米のみならずアフリカやラテン・アメリカにも次々に共同体が創設されていき、日本では1992年に静岡の「かなの家」がラルシュ

共同体に加わった。他方で 1971 年には、ラルシュに多くの「よそ者」が集まることに対して、トローリー村民の間に警戒感と恐怖心が生まれ問題が起きたという。ヴァニエはこのときの経験を「あらたなゲットーを作り出す危機」だったと振り返り、これを機に、地域社会への統合という原則が再確認されることとなった[Vanier 1995: 31]。

この活動の急速な発展の背景には、1960-70 年代に世界中の若者を魅了した共同体運動と、1962-65 年の第 2 ヴァチカン公会議の影響下（教会の「民主」化）での、カトリック世界における平信徒活動の活性化があった。どちらも既存の社会秩序・規範に異議を唱え、一人ひとりが理想社会の実現のために自ら主体的に社会に参加するという気運を示していた。とくにカトリック教会世界においては、19 世紀末から影響力を増していた「カトリック・アクション（平信徒の教会参加）」運動が、20 世紀前半に抑制されたのち、聖職位階性との関係について指針が示され、公式に推奨された時期であった。ジャン・ヴァニエのように、司祭でも神学者でもない一介の平信徒が、オブザーバーとして司教会議に参加を認められるようになるなど、このうち教会の重要事項が話し合われ決定される過程の公開性が高まっただけでなく、平信徒が黙想会などの祈りの場を主導することもできるようになった（教皇ヨハネ・パウロ 2 世がなくなる前年、最後の旅となったルルド巡礼の時、「ロザリオの祈り」の主導を任されたのはジャン・ヴァニエだった）。カトリック教会の「今日化」といわれる潮流は、平信徒の教会活動への参加促進を意味しており、ラルシュ共同体運動もそれに後押しされて広がっていったのである。実際には教会組織の上層部の間に意見の相違も見られ、ラルシュと教皇庁との関係にも紆余曲折があったというが、1970 年代後半からは良好となり、各共同体においても教区司教・司祭と良好な関係を築くことが重視されている。

ヴァニエの講演・執筆活動と知名度によって世界各地に共同体が増える一方で、各共同体の独立性を守りつつ一つの共同体としてまとまりを保つためのシステム作りがなされ、1973 年には「国際ラルシュ憲章」が採択された。1975 年に地域委員会（一国内に多くの共同体がある場合は国単位）と国際委員会の二本立てとなって「脱中央集権化」が図られ、1982 年の第 5 回国際委員会で、当時 63 あった共同体を「アメリカ／ヨーロッパ・アフリカ・中東／アジア・オセアニア」の 3 ゾーンに分けるなど、活動の柔軟性が

保たれるよう配慮がなされてきた。実際、共同体の運営・財政状況や対処すべき問題などは国や地域によって違い、それぞれの共同体が個別に対応しなければならない。また知的な障害がある人たちを中心に各地から集まってきた「よそ者」が共同生活を送る場合、先述のように地域社会との関係作りが重要であり、また現地の文化伝統への配慮が必要になる。各共同体のニーズと目指すべき在り方は現場によって異なり、さらにメンバーの顔ぶれや年齢によるニーズの変化によっても刻々と変わっていくので、トロリー共同体を「原点」として権威づけたり、「モデル」のようなものを確立してその正しいコピーを各地に作ろうとしたりするのは、現実的でないばかりか有害でさえある。ヴァニエが1980年の手紙に「欧米のまねではいけない」と書いているように[Vanier 1994: 233]、各共同体の望ましい形は、成員が自分たちで模索し作り出し続けていかなければならないのである。他方で、経済的にゆとりのある共同体が困窮する共同体を支援するという協力関係も結ばれている。また当初から非カトリックや非キリスト教の共同体が存在していたが、宗教的な活動がはじめて共同で行われたのは、1986年のエキュメニカルな（さまざまな宗教宗派合同の）黙想会であった。1990年代に入ると、ヴァニエの引退後を見据えた組織改革が進められ、メンバーも参加した話し合い・アンケートや国際会議が重ねられて、1993年には「関係」への権利を明記した新憲章が採択された。

（2）ラルシュでの暮らし：当たり前の日常生活

ラルシュ共同体運動の基盤は「家庭」である。ヴァニエが二人の男性と住み始めた1960年代のフランスでは、知的な障害がある人たちはほとんどが施設に収容され、家庭を知らないまま生涯を過ごしたという。ヴァニエがその現状に心を痛め、家庭での暮らしを提供したいと願って始めた活動は、家庭とはどのような場所なのかについての彼の考えと、その考えに共感した人々が抱く「家庭イメージ」を反映しており、「市民社会」において「家庭」とはどのような場所なのかを考える手がかりになると思われる。

共同体の目標は「普通の家庭の日常を生きる」ことである。一つの共同体は4-5軒の「ホーム」からなり、各ホームに4-5人のメンバーとほぼ同数のアシスタントが暮らす。作業所やデイ・ケア・サービスを備える共同体もあり、アシスタントの仕事にも、ホームのアシスタントと日中活動のアシスタ

ントの別がある（最近では共同体の外で暮らし、ホームに通ってくる「リブ・アウト・アシスタント」もいる）。ホームで暮らすアシスタントは6時半頃起床し、朝食係はカップ・飲み物・シリアルなどを食卓に整え、他のアシスタントは自分が担当するメンバーの一日の準備を始める。担当するメンバーによって必要な介助は異なるが、起床と身繕い、朝食とお弁当の用意（各自の好み・必要を把握していなければならない）、日中の活動（デイケア、共同体内作業所、外部就労など）の準備をする。メンバーが出かけると、ホームのアシスタントは担当の掃除・洗濯・買い物などを午前中に済ませ、昼食を一緒にとった後はメンバーが帰ってくるまで休憩時間を思い思いに過ごす。この間、日中活動のアシスタントは各担当セクション（ろうそく・石けん・カード・アクセサリー・小物作り、陶芸、絵画、グループでのゲーム、マット運動、水泳、ダンス、乗馬、マッサージ、リラクゼーション等。近年は「エンパワーメント（障害者の能力開発・社会参加の促進）」の意識が高まっている）でメンバーと過ごす。メンバーの帰宅後は、夕食当番（ホームによって違いはあるが、筆者の滞在したいくつかのホームでは、メンバーとアシスタントがペアを組んで作っていた）以外は、各自仕事の続きをしたり歓談したりと思いつきに夕食まで過ごす。そして迎える夕食。食卓を囲むことはラルシュの暮らしで最も重視されていることの一つであり、ヴァニエは食事を「一日のクライマックス」と呼んでいる[Vanier 2017: 49]。食前・食後に祈りを捧げたり歌を歌ったりとホームによって形はさまざまだが、共に糧をいただくことに想いを致すある種の「儀式」を伴い、分かち合いを意識する。いわゆる経済大国や先進国のラルシュであっても財政状況は決してよいとはいえず、食費も潤沢とはいえないが、バランスのとれたメニュー作りは当然のこと、器や盛りつけを工夫するなど、手を抜いた粗末なものにならないよう心がけられる。また祝祭日や誕生日など、共に楽しみ喜ぶ機会を毎週のように何かしら捉えては、飾り付け・プレゼント・余興など入念な準備をして、当日もとことん楽しむ。ラルシュは「祝祭 (celebration) の共同体」であることをアイデンティティとして掲げているのである。

このようなラルシュのホームが一般に想定されてきた「家庭」と異なるのは、そこが「縁もゆかりもない者たち」の集まりだという点である。哲学者のジュリア・クリステヴァは、ヴァニエとの往復書簡の体裁の共著でまさきに、「どうやってあなたの「友達」の友達を見つけ、募り、育て、その心

をつかんだのですか」[Kristeva, Vanier 2011: 10]と尋ねている。クリステヴァの息子には障害があり、彼女は障害のある人とその家族がおかれた状況の改善に向けた積極的な発言と活動を行っている。そのクリステヴァが、母親である自分は障害がある子どもと生きることを選んだのではなく「課せられた」のだと語ったうえで、普通は身内しか首を突っ込まないところに、ラルシュでは赤の他人が集まってくる秘密を問うているのである。「信仰があるからだ、などとはいわないで」と釘を刺すクリステヴァに対し、ヴァニエの応えは「喜びがあるから」というものである[ibid.: 23]。だがその「喜び」は、後述するように、決して「安楽」なものではない。

そのラルシュも、時代の流れのなかで変化を余儀なくされている。現在、特に欧米先進諸国では、ラルシュ「共同体」は「社会福祉法人」として行政の財政支援と監督・指導の下におかれ、その結果、障害者と労働者の権利を守って「正しく」運営される「プロ化」が進展している。たとえば、アシスタントの労働時間遵守が徹底され、一日の休憩時間、一週間に一度の休日、定期的なまとまった休暇など、24 時間体制の家庭的共同体を自認していた頃とは大きく異なる就労リズムとそれに伴う就労意識が生まれている。メンバーも、かつては口コミや人脈を頼りに集まっていたが、現在は行政手続きに則って施設入居希望者リストの上位者から順番に打診があり、面談を経て入居する。またアシスタントも、多くは EU 諸国に見られる若者向け（フランスの場合は 16-25 歳対象）の「市民貢献活動」システムを利用して 1 年間（2 年まで延長できる）滞在する短期ボランティアの若者である。特にドイツからは、社会経験を積むための「ギャップイヤー」（高校卒業と大学入学の間の 1-2 年）を利用して多くの若者が各地のラルシュにボランティアとしてやって来ている。彼らはボランティアを受け入れる団体・施設を紹介する民間組織などの仲介で、自分の希望分野（教育、介護など）や国・地域のなかから選んで応募してくるため、宗教や福祉への関心が高いとは限らず、ヴァニエやラルシュのことをよく知らないままやって来る若者も少なくないという（荷ほどきもせぬまま帰ってしまった若者もいたという笑いを、いくつかの共同体で聞いたことがある）。滞在期間中、介護技術や倫理教育プログラムへの参加が義務づけられており、事前にオンライン教育システムの修了や犯罪経歴証明書・保険加入証明等の提出を求める共同体もある。ヴァニエのメッセージを伝えるための勉強会も開かれているが⁽²⁾、アシス

タントのサポート体制（メンターやカウンセラーとの面談）、定期的な報告書の提出とボランティア終了時のレポート作成など、「市民教育」としてシステム化されている印象がある。また行政の指導やメンバーのニーズ自体の変化もうけて、欧米のラルシュでは近年「一人暮らしサポート（自立支援）」にも力を入れる共同体が出てきている。ラルシュの活動も、障害者支援の主流となった「エンパワーメント」に力を入れるようになってきているのだが、このような現在の姿について、かつての「共同体」とは大きく様変わりしたと感じている創設世代のスタッフもいる。これは、「施設から家庭へ」という展開の先に「家庭から社会へ（両親からの自立）」という「成長過程」を求めるのか（人間の「成熟」とは何か）、という問いでもある。ラルシュは今、「共同体」（〈ラルシュ〉のアイデンティティ）とは何かという問いに向き合っている。この点について、ヴァニエが講演・執筆活動を通して繰り返し述べ、アシスタント教育の中心ともなっているメッセージは、次の二点にまとめられる。

2. ジャン・ヴァニエのメッセージ

（1）「貧しさの霊性」

ヴァニエはラルシュ創設時の 1960 年代を振り返って、「貧しい者とのコミュニティ」というヴィジョンが若者を引きつけたと書いている[Vanier 2017: 53]。彼はホーム立ち上げの直後から支援者に向けて「ラルシュ便り」を書いてきたが、その一通目（1964 年 8 月 22 日）のはじめには、「ラルシュは、私たちの社会における貧しい者に向け、本当の精神的な家族、友情と兄弟愛のネットワークを創りたいと願っており」、この便りは「わたしたちの共通の理想を明確にし、イエスの顔であるところの貧しい者への愛を育む」助けとなるだろうとある[Vanier 1994: 21]。1972 年 11 月 19 日の便りには、「最も貧しい方であるイエス、自身の貧しさを通して人々をいやし平和をもたらした方」の道をたどりたいと書いている[Vanier 1994: 164]。

ここでは、出会う相手の貧しさがイエスの貧しさとして受け取られているが、ヴァニエはさらに自らも貧しくなりたいという切望を表明している。「私が貧しい者を前にして常に苦しみ続けるよう、イエスがしてください

ますように」[Vanier 1994: 175]。「もっと貧しくなりたい。自分が豊かで力を持った者の階層に属しているということをまざまざと感じ続けている」[Vanier 1994: 179]。後者はマザー・テレサのもとでミサに与った後の感想だが、当時の便りには頻繁にインドの話題が登場する。そこでは、差別と抑圧への言及に欠ける「インドの理想化」と受け取とられかねない、貧しさにもかかわらずインドの人々が発している明るさと心の自由に対する感嘆の念が語られているが、この同じ頃、ヴァニエは先進国で刑務所訪問を重ね、豊かとされる国の人々の心の不自由（「囚人」の状態）を痛切に感じており、インドはその対極と見えていたように思われる。この受刑者との交流を通して、ヴァニエは「貧しさはイエスのしるしであり現存である」[Vanier 1995: 53]という確信を深めたと語っている。

このように、ヴァニエが語る「貧しさ」は、第一にイエス・キリストの言動に結びついている。だが同時に、それはあらゆる人間に共通の「貧しさ＝弱さ」全般へと拡大される。彼は、私たちが生きる社会の「生きにくさ」の根底に「(自他の) 貧しさの否定＝力への希求」を見だし、「弱者の支援」についても次のように注意を促す。

ヴァニエは「最も貧しいもの、排除されたもの、困難を生きるもの」とともに生きることが福音書の教えでありイエスに至る道であるといいつつ、その「貧しい者と共にある」あり方について、それが「支援」になってはいけなさと繰り返し述べている。「惜しめない者の病…彼らは他者のためにたくさんの方のことをする、与えて与えて、でも受け取ることを知らない。他者に出会い共に生きる喜びを受け取るためには、それをやめることを学ばなければならない」[Vanier 2017: 60]。ここで戒められているのは、他者の貧しさ・弱さを「手段化」する危険、ラルシュが支援・善行という目的のための場になる危険である。「障害と共に生きる」ことは、その人たちを排除しないことであるのは当然だが、支援することでもない。支援も、「対象化」ということでは排除と同じ（支援対象か排除の対象かの別があるだけ）なのである。そして貧しさを対象化する、すなわち「自分の外側にあるものとする」こともまた、貧しさの「自分自身からの」排除であると考えられる。そこから、「私の領域」としての「私たちの社会」からの、貧しさの排除」までは、一続きであるだろう。ヴァニエは 1976 年 12 月のホンジュラスからの便りで、「持てる者と持たざる者の断絶が他のどこよりも激しいラテン・アメリ

カ」で、「アシスタントが、力と安全性を所持しある種の威信を得るために、支援される者から利益を得る」ときに生まれる「危険」について考えさせられたと書き[Vanier 1996: 134]、1977年にもホンジュラスと合衆国を巡りながら「障害がある人たちを「利用する」のは簡単」だと述べている[Vanier 1996: 169]。このような「優越性の希求」は、競争社会での成功、すなわち「力」の評価という価値観を背景におこることである。ヴァニエは、現代社会における「力強く有能な人」という理想が、「老人や病人、能力の劣った人を疎外」するという社会のあり方を引き起こしているが[Vanier 2005: 64]、それに対して、自分自身の弱さと限界を受け入れることこそ重要だと述べている。「貧しさの霊性」は、「力を求める気持ち（優越性の希求）」からの支援ではなく「出会いの場に身を置く＝力を手放す」経験を、「他者の弱さ」を利用するのではなく「自分の弱さ」に向き合うことを、意味しているのである。

（２）「力への誘惑と弱さへの恐れ」（他者の支配・排除、内閉）から「共同体への帰属による解放」へ

「貧しさ」は暴力にさらされやすく、貧しい人は傷つけられやすい立場に置かれて現に傷つき、傷ついた人は叫びを上げる。そこで「重要なのは、貧しい者の叫びを聞くこと」[Vanier 2017: 65]、耳をふさがないことである。耳をふさぎたくなるのは、聞いてしまうと、その叫びが自分の中にもあることに気付かされるからだという。「メンバーの傷と、彼らの無条件の愛を求める衝動に触れることで、アシスタント自身の傷や衝動や暴力も露わにされる」[Vanier 2005: 123]。それは、貧しさの「対象化」の挫折といえるだろう。人は自分の貧しさ・弱さを露わにされたくない。それは「恥ずかしい」ことであり、なにより他者につけ込まれるからである。あるいは他者の叫びが、自分に対する攻撃と感じられ、それに対する反撃の衝動が起こる。「貧しさ」は、「被害／加害」関係を容易く生んでしまうというのである。

このような、「暴力に転じる「弱さ」としての「内なる貧しさ」の問題を、より深く理解できるようになった重要な契機として、ヴァニエは1980年に一年間、一切の対外活動を離れて重度心身障害者のホームでアシスタントとして過ごした時の経験を繰り返し語っている。彼は、貧しくかつ生き生きとした力を吹き込む関係の中で「時間を失う」ことを学び直すために、「効

率」の領域をきっぱりと離れなければならなかったと振り返る。そしてその期間に、憎しみや、自分より弱い者に悪を為すという、自分のうちに隠された闇の力にいっそうはつきりと触れ、自身の貧しさが少しは見えるようになったという。「重い障害を持った人との日常生活の中でこんなにも明らかになった自分の闇の経験によって、自分自身の根源的な貧しさを受け入れ、自分自身の真実を生きなければ、愛のうちに成長することはできないということを思い知らされました。貧しさは私たちの外だけでなく、私たちの内にあるのです」[Vanier 1995: 68]。1981年3月の便りには、「自分の傷つきやすさ、私がよく「傷」と呼んできたもの、そして痛みから自分を守るための防衛システムと攻撃性を、より自覚するようになりました」[Vanier 1996: 265-269]とある。ヴァニエは、このとき自分が介助を担当した青年のことを、他者への開かれ（愛）こそ最も弱い者の豊かさであり、思いもかけない喜びの源であることを教えてくれた、「私の先生」だと書いている。そして、他者に向けて開かれた「弱さ」こそ、他者の閉ざされた心を癒やし、社会を変える」と述べる[Vanier 2017: 13]。

力強く有能であることを評価する現代社会で、私たちは弱さ（貧しさ）を怖れ、弱さを打ち消すことに躍起になり、そこに暴力が生まれる。ヴァニエは、そのような自分の内なる暴力性（弱さへの恐れと力への誘惑）を認めて初めて、他者の苦しみと暴力に向き合えるとしたうえで、さらに、そのためには共同体という場とそこに集う他者の存在が必要だと述べる。共同体という、誰も排除せず「すべての人に開かれた帰属の場」、かつ、一人ひとりが「他者に対して開かれるための場」に迎え入れられることで、自身の暴力性と向き合い弱さへの怖れから解放され、自他の弱さを共に生きることができるといっているのである。この「共同体への帰属」は、「特定の誰かとの間の親密な絆」とは異なり、そこに迎え入れられ居場所を得たことにより可能となる「解放」（閉鎖性の解除）という目標と結びついている[Vanier 2003: 7f]。

「貧しさ（メンバーの弱さ）」によって開かれ、「貧しさ（人間に共通の弱さ）」を安心して開くことができる場、「他者の弱さ」を利用することからも、「自分の弱さ」につけ込まれない（利用されない）よう防衛的暴力を振るうことからも、免れることができるという、他者への信頼に基づく安心感から、「弱さ」を露わにすることができるようになった場、「弱さ」を受け入れ「弱さ」に開かれた場。そのように構想される共同体と、市民社会とは、どのよ

うな関係にあるのだろうか。

3. 「権利」と「祝祭」：弱さをどこでどのように生きるか

(1) 「権利」の保障

「ケア・ハウス」としてのプロフェSSIONAL化要請と、労働者の権利の保障という「市民社会の価値・理念」は、重要で遵守すべきものである。だがそれだけでは不十分、というより、実際の「介護現場」は「市民的権利」の観点からみて問題を抱えているという指摘を、エヴァ・フェダー・キテイは著書『愛の労働 あるいは依存とケアの正義論』で展開している⁽³⁾。彼女は、幼児・病人・障害者・老人など、依存状態にある人たちを支える営みを「依存労働」と名づけ、欧米型先進諸国においてはそれらの依存労働に携わる人々もまた、市民社会における「正義（平等な権利の保障）」の観点からは「依存状態」（自律した市民として義務を果たし力を発揮する自由がない、すなわち完全な市民ではない）に置かれるとして、依存労働をめぐる構造的暴力（依存状態にある人々を支えることで自らも依存状態になる）の存在を問題化する。その根底には、ジョン・ロールズの正義論への批判がある。

キテイは、ロールズの「正義（権利）」論の次のような理論的前提を問題視する。「全面的かつ能動的に社会に参加し、生涯を通じて直接的・間接的に互いに協力し合う人々の関係こそが、正義の基底的な問題であるから、次のように想定することは道理にかなっている。すなわち、すべての人が通常の範囲内の身体的ニーズと精神的能力とをもっており、それゆえ、特別な健康上のケアや精神的欠陥をいかに扱うかという問題は、分けて考えられる」[Rawls 1992: 272 n.10. 強調はキテイによる。キテイ 2010: 184-188]。彼女は、このような「自立という虚構」に基づき、「依存という事実」・「人間の条件」を度外視した条件設定のもとでのみ実現可能な「平等」は、真の平等ではないと批判する[キテイ 2010: 10-13]。だが「依存という事実がすべての市民の完全な平等という考え方と両立するのかどうか」を検討し、「依存を包摂する新しい平等理論を練り上げる」という目標には、本書では到達できなかったと、日本語版の序文に記している[キテイ 2010: 29]。

その一方で、キテイは「依存関係」の概念を用い、行政が求める「ケアの質」を保障するのは、行政が保障し損ねている「依存労働の現場を構成する依存関係の質」であるとし、そこから、依存労働の現場を構成する「互恵的・相互的にならない（非対称・「不平等」な）依存関係」が保障されることによってはじめて真の「市民的平等・権利」が実現するという持論を展開している。これは、権利と平等を「何に基づいて」構想するかを変えるべきであるという提言である。彼女は「個人にもとづく平等ではなく、つながりにもとづく平等の基盤」（強調は原文）を形成する必要を述べ、「つながりにもとづく平等は、「平等な地位にある他の個人と等しく私に与えられるべき権利は何か？」については問わない」、「依存は、人間の条件の一つの特徴であり、公正な制度を担保するのに必要な社会制度の設計や道徳的直感に、重要な意味をもつ…どんな社会も子どもをケアする人がいなければ世代を越えて存続することができない…子どもだけでなく、病気や障害のある人、介護が必要な高齢者のニーズを満たす人がいなければ、どんな社会も、まともな社会でいられない」と書く[キテイ 2010: 79f]。重要なのは、それが「「権利」とは異なる基盤」であると示唆されていることである。これは、ヴァニエが構想する「「弱さ」に基づく場」と、「権利と正義の実現を保障する市民社会」のあるべき姿を巡る思想をつなぐ、重要な議論と考えられる。

だがキテイの関心は「真の平等」の実現にあるため、依存関係については障害がある娘セーシャとの体験談に留り、考察は深められていない。そのなかで、セーシャのケアを四半世紀にわたって続けてきたペギーという人物との関係が次のように語られている。セーシャに対するペギーの関係は、もはやケア労働の域を超えてしまっているが、「この関係っていったいなに？」「名前のない関係」、かつて私の息子はこううまく表現した。どうしてこれまで誰もこのような関係について言及してこなかったのだろうか？」[キテイ 2010: 347]。そこにはサラ・ルディックの次の言葉も引かれている。「ケアという労働は、ケアを与え、受け取る人たちの関係の中に、そしてそれを通してつくられる」[Ruddick 1998. キテイ 2010: 346f]⁽⁴⁾。そのような、まさに「依存関係が保障された場」という以上に「依存関係に基づく場」として、ラルシュ共同体とそのヴィジョンを考えることができるように思われる。

ヴァニエも「関係が最も大切である。でなければ私たちはすぐさま、法と

規則に基づく組織になってしまう」[Vanier 1996: 303]と述べている。ここには、「法と規則に基づく組織」という言葉で、ラルシュが「福祉サービスの提供施設」になってしまう危惧が表明されているだけでなく、彼が抱く「ノーマライゼーションへの違和感」も関わっていると考えられる。ヴァニエは、1971-72年にかけてスカンジナビアのノーマライゼーションの動きに対して理解が深まったと書いているが、同時に「私たちの社会におけるノーマルは、本当に人間的なものなのだろうか」と問い、「弱者を軽んじ排除する物質主義と個人主義の文化に対して、敢然と立ち向かう」ことがラルシュの使命だと述べている[Vanier 1995: 55-57]。近年はさらに批判的な調子を強め、「正常さの専制」[Kristeva, Vanier 2011: 23]という表現を使っている。たしかにそこには、ヴァニエのいう「力への志向性」が認められ、「個人の権利の十全な開花」を念頭に置いた理想は、キテイが描いているような現在の社会状況の下では、「依存関係」のない世界を目標とする危険をはらんでいるといえるだろう。

ただし語彙の点で、キテイとヴァニエには違いがある。キテイが「依存関係」という概念で論じるところで、ヴァニエは「帰属」という言葉を用いる。ヴァニエが共同体を説明するとき用いる「関係的な生 (*une vie relationnelle*)」「帰属の場 (*un lieu d'appartenance*)」という表現には、「依存 (*dépendance*)」という含意はない。共同体に関するヴァニエのメッセージから「依存」の観点が除かれている理由は、それが、上述の「貧しさの霊性」で述べた、「支援を通じた「優位性」の確立」の戒めという主題として論じられているからと推察される。ヴァニエはまた、「(人に) 成るために帰属する *appartenir pour devenir*」ともいう[Vanier 2017: 76]。それは、人が人であるためには「関係の場」に帰属している必要があるということの意味しており、「人と人の関係(「権利主体」同士)」のバリエーションとして「自立」や「依存」を考えるのとは異なっている。ヴァニエはこのフランス語の「*appartenance*」を、英語では自らのメッセージのキーワードとして「*belonging*」という言葉でより前面に押し出している⁶⁾。その「*appartenir*」「*belonging*」の場につけられた「ラルシュ(契約のしるし)」という名について、それは「あなたたちならびにあなたたちと共にいるすべての生き物と、代々としえにわたしが立てる契約のしるしはこれである」(旧約聖書「創世記」9章12節)といわれているもので、「この神の言葉は、私たちが共に

生きることで味わう喜びを正しく体現している」と述べたのち、彼が日々の暮らしのクライマックスと呼ぶ食卓を、イエスが語った次の光景に類比する。「昼食や夕食の会を催すときには、友人も、兄弟も、親類も、近所の金持ちも呼んではならない。その人たちも、あなたを招いてお返しをするかもしれないからである。宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、身体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。そうすれば、その人たちはお返しができないから、あなたは幸いだ」（新約聖書「ルカによる福音書」14章12-14節）[Vanier 2017: 49f.]。実はここでは、この譬え話の結びの一文が削除されている。福音書では、イエスの言葉は「正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる」で終わっているのである。この「報い」を約束する文言が削除されたことで、たとえば来世でのことではあるにせよ「目的」をもった招待（互酬性の期待）になってしまうことが、より明確に回避されることになる。そして、その宴に招かれるのが貧しく弱く、互恵的關係をつくることができない「非対称な」（力の釣り合いという点で、平等ではない）者たちであることが、際立つことになるのである。

（２）祝祭

ヴァニエは、自分にとって「共同体での暮らしは解放だった」といい[Vanier 2017: 75]、「私たちは望んで生まれてきたわけではない。いつ、どうやって死ぬかわからない。私たちは生命の所有者ではない。授かった...この、どうしようもなさ (helplessness)」が、神と共同体の兄弟姉妹に向き合わせてくれたと述べる[Vanier 2010: 22f]。そして、「共同生活で最も大切なのは...毎日を祝うこと (celebrate life)、生だけでなく死を祝い、死について語り、死にゆく人々に寄りそうこと」であり、共同体は「死 (究極の貧しさ)」に対する怖れから解放される祈りと祝祭の場でなければならないという。ラルシュ共同体運動の意義を巡り神学者や学者を交えて開かれたシンポジウムで、現代アメリカを代表する神学者スタンリー・ハワーワスも次のように述べている。「私たちは苦しみを受け入れる力を失ってしまった結果、なくせない苦しみに対して暴力をふるい、死を否定するようになった。そのような暴力に対抗するには、生老病障死という生命のどうしようもなさ、共に、十全に、生きられる場所が保持されなければならないが、それは一朝一夕にはできない。生きる手間を倦まず共にするルーティーンが親しみを創り出し、

親しみがそのような場所を創り出す。そこに祝祭と美しさがなければ、人はうんざりしてしまうだろう」[Hauerwas 2010: 120]。

二人が語る「解放の場」は、このように、ほかでもない「日常が生きられる場」である。ヴァニエは日常の尊さを繰り返し述べる。「福音の種は、日常生活の中に深められ根を張らなければなりません」、「わたしもまたトロリーの日常生活に飛び込み、信頼を寄せなければなりませんでした」、「わたしたちの日常生活にもっと信頼をよせることで、最もよく助けることができるかもしれません」[Vanier 1996: 22; 143; 178]。そしてその日常は、「貧しい者の叫び」と共に生きることであり、それは「降りていく (descendre)」[Vanier 2017: 107]こととされる。これに関して、興味深い事例がある。静岡にあるラルシュ共同体では、二軒の家に畳スペースがある。一軒の、食堂の隣に襖で仕切られた6畳間は夜の集いで使われるが、それ以外の時は誰かがいることはない。もう一軒の家には、食堂の一角に床から一段高くなった畳スペースがある。ここは最初から、この家に住むことが決まっていた車いすを使うメンバーがなるべく皆と一緒にいることができるようにという、明確な目的をもってつくられた。現在、そのスペースには他のメンバーやアシスタントも集まってきて、あぐらをかいったり寝転がったり、リラックスして過ごしている。その有り様は、弱さ(貧しさ)に対して「無防備」という表現が最も適切に思われるものであった。ここで目を引くのは、畳の部屋であればリラックスできるから人が集まる、というわけではないことである。「弱い人」が一緒にいられるようにと、その人の利便性のために「場」をつくったら、その「場」が他の人を呼びこみ、呼び込まれた人たちが、寝転がってリラックスしているメンバーとおなじように、その姿勢を低くするようになった。つまり、「弱い人」に合わせて作られた場に集まった人たちが、その弱い人と同じように、そこでは弱くなる(降りていく)ことができているのである。これは、誰かがイニシアチブをとったものでもあらかじめ見越されたことでもなく、ホームの責任者も、筆者が指摘するまでは気付いていなかった。

ここでは、「つながりを断ち切る「障害」(障害を理由にした断絶、障害のために一緒にいられないこと)」から、「人々をつなげる「障害者」への転換が起きている。貧しさ(弱さ・死)への恐怖によってつながりが断ち切られる状況(「依存関係」の「市民社会」からの排除)から、「他者を受け取る力と

しての貧しさ（喜びの源となる、最も弱い者の豊かさ）」を生きる障害者によって人々がつながる場への転換。ヴァニエは、この「人間の根源的貧しさが解放される場」で生きることが、人々の閉ざされた心をいやし、社会を変える可能性を語っているのである。キテイが指摘していた「依存状態にある人を支えることで、自らも依存状態に陥る」という状況も、見方を変えれば、「貧しい人と共にあることで、自らも貧しくなる」ことといえる。

「貧しさ」と「貧しさ」が互いを開きあうとき、暴力（互いを閉じる）から解放（自他の弱さを受け入れる）への転換がなされる。それがラルシュという、「通常の」家庭ではないところで起きていることの意義を考える必要がある。私たちの社会では現在、生命を祝い死の恐れに耐える場所・間柄は、「家族」に限定されているといえるだろう。その場合、生命現象は私的所有権の圏域で、「権利（生存権）」として生きられ守られることになるが、ここには二つの問題があると考えられる。第一に、「私有権」は他者の干渉から守られることと引き替えに、「私事」の領域から出ることを抑制されることになる。これに関連して、ヴァニエは次のようにいっている。「憎しみ、恐怖、抑圧からの自由こそ、私たちが求めて祈る内面の自由」[Vanier 1996: 22]だが、「私たちは多かれ少なかれ、利己心によって恐怖の柵の背後に囚われています」[Vanier 1996: 30]。しかし「（インド、象牙海岸、ハイチでは、貧しい人々は「開かれて」おり）ヨーロッパで私たちがそうであるようには、自分たちの私的で小さい世界、個人あるいは家族という牢獄に閉じこもっていません」[Vanier 1996: 68]。

だがさらに重要なのは、人間は「権利」によっては根源的「死（究極の貧しさ）の恐怖」から守られることも解放されることもないだろう、ということである。「弱さ＝依存関係」という「人間の条件」が権利として保障されたとして、ではそれを生きる力はどこから汲むことができるだろうか。自分たちの弱さ（貧しさ）に抗わない、認める、だけでなく、弱さ（究極の貧しさとしての死）と和解し、共に生きていることを愛おしむ（ヴァニエは「ばかげたこと」を楽しんだ経験談をすることを好む）ためには、弱さ・死への恐怖に囚われた状態から解放される必要があり、それは私的にはできないとヴァニエは考えているのである。

ただし、「弱い生命を祝う」、私たちを「究極の弱さである死の恐怖から解放する」とは、「弱さ」を「私事」、すなわち「私や家族の問題」に還元しな

いことである、というヴィジョンに関し、「生命現象が社会と一致する」ことに対するハンナ・アレントの批判に注意を払う必要がある。そこには、脆弱な生命現象を個人・家族の「私的な問題」から解放することが、それを「公の問題（社会・国家による「弱さ」の管理）」に回収することになってはならないという、「生・権力」をめぐる問題が潜んでおり、ラルシュが期せずして始めたのは、その両方を回避する挑戦だったのではないかと思われる。

4. 結論

キテイの議論は、「平等な権利」という理念とそれを保障する社会制度だけでは、脆弱な生命現象を生きる人間同士の関係を評価し損ね、保障し損ねるということを示唆している。彼女は、現行の「権利」概念だけでは十全なケアを基礎づけることはできず、そこには「(依存) 関係 (の質)」を保障する別のヴィジョン（「つながりに基づく平等の基盤」）が必要だと述べる。ヴァニエが、「ケア」という「(二者) 関係」を想起させる言葉ではなく、「帰属 (appartenance, belonging)」という、「場」を前提とする言葉を用いていることは、一方で、キテイのこの提言に呼応しているように思われる。と同時に、ヴァニエのメッセージにおいて「場」が鍵概念となるのは、「死の恐怖」が「ケアされる」ものではなく、「解放される場」を必要とするという彼の洞察と深く関係しているように思われる。

この「場」への「帰属」の必要性の論は、「権利主体」が特定の「(立場) から切り離されていることを「討議・判断・価値の中立性」(公共性) の条件として求める、「市民社会」の正統性を巡る理念と対照的である。では、ラルシュ共同体という「帰属の場」のアイデンティティと正統性は、どこに求められるのか。これに関して、ヴァニエは次のように述べている。「(インドで) 私たちの共同体がどれほどアイデンティティの欠如に苦しんでいるのかを意識しました。多くの人から尋ねられました。あなた方は誰です？シスター？修道士？…私たちを何らかのカテゴリーに入れたがっていました、そうすれば安心できるからです。そのうえ私たちのホームは、異なる宗教的バックグラウンドの男女を受け入れることになっていたのです」[Vanier 1996: 123]。そして「少しずつ、ラルシュは霊性と独

自のアイデンティティを発見していきました、修道会とも信仰共同体とも施設とも違う…一つの教会に属する方が、霊的生活を個人の問題に還元する方が、よほど簡単だったでしょう」[Vanier 1995: 75]。だがそのどれにも「ならない」ことをラルシュは選んだ。「私たちのすべてのコミュニティの中心（ハート）には、私たちの生活に意味を与え、私たちのホームに一致をもたらす」メンバーがいる[Vanier 1996: 123]、このホームのいわば「正統性」は、「メンバーと共に生きる」ということによつてのみ与えられるのである。ヴァニエは、「イエスは私に、彼が私に託した者たちとの契約を生きるよう求めている」と書く[Vanier 1996: 267]。

障害（貧しさ、弱さ）と生きるという「生き方」を、「私的所有権」という「論拠」から解放するホーム、弱さを「使う」（善行・暴力いずれかの形で「力を振るう」）のではなく「受け取る」ホーム、それ以外に理由も説明のしようもない場所。「市民社会」は「権利」に基づいて「日常」を守ろうとしてきたと考えてよいだろう。だがその市民社会と、それが正統性の根拠として求めてきた「公共性」という「超一場（脱文脈化）」には、人間が「死という究極の貧しさ」を排除できない「関係」を幸せに生きるうえで欠けたところがあるのではないか。そのことを言葉で問うのではなく生きる場所として提供し、守られるべき日常とはどのようなものかについてのヴィジョンと実践を鍛える場を開示するところに、ラルシュ共同体の意義があると考えられるのではないだろうか。

[付記]本稿は平成 27-30 年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）「知的障害者との共同生活」運動の国際的展開の実体と平和学への貢献可能性の研究」の交付を受けた研究成果の一部である。

註

- (1) ヴァニエは平和の構築への貢献が評価され、2015 年にテンブルトン賞を受賞している。
- (2) アシスタントが経験する変化をうかがい知る資料として、ボランティア期間終了時に書かれるレポートがある。大学の学位論文として提出されたものの中には、数は少ないが公開されているものもあり、いくつかを *Intercordia* という団

体（若者の社会貢献活動をサポートする組織）のホームページで読むことができる（www.intercordia.org）。そこには、ラルシュでの暮らしに慣れていくに従い、ラルシュ共同体の参加者「らしく」なっていく過程が垣間見える。またそれらは、「机上の学習」ではなく「日々の暮らしのなかで身につけたもの」として描かれている。

- (3) エヴァ・フェダー・キテイは、ニューヨーク州立大学ストーニー・ブルック校哲学科教授で、医学・共感ケア・生命倫理センター長を兼任している。重い障害を持つ娘を育てる経験に基づき、「人間を自立的存在と前提する人間観」とそこから帰結する「正義・人権」論の批判的検討を行っている。
- (4) キテイは同書で、「ニーズのある人とそのニーズを満たす位置にある人との関係性によって、道徳的要求が生じる」というロバート・グディンの「脆弱性モデル」を参照している（キテイ 2010：133f）。脆弱さに対して誰に応答義務（社会からの期待）・能力があるのか、という論考は、クリステヴァがヴァニエに投げかけた問いに関わっている。
- (5) Cf. Beth Porter and Greg Rogers, *Belonging: The Search for Acceptance. A documentary film about the social vision of Jean Vanier* (study guide), L'Arche Canada, 2008.（ヴァニエの映画を企画した監督に対し、ヴァニエが「belonging」についての作品作りを持ちかけて実現したドキュメンタリー映画に、教師と学生用の学習ガイドを加えた教材）。

参考文献

- ジャン・ヴァニエ 2005 『人間になる』 浅野幸治訳 新教出版社。
- 同 2003 『コミュニティー ゆるしと祝祭の場』 佐藤仁彦訳 一麦出版社。
- エヴァ・フェダー・キテイ 2010 『愛の労働 あるいは依存とケアの正義論』 岡野八代・牟田和恵監訳、白澤社。
- Stanley Hauerwas, 2010, "Seeing Peace: L'Arche as a Peace Movement", in Hans S. Reinders (ed.), *The Paradox of Disability. Responses to Jean Vanier and L'Arche Communities from Theology and the Sciences*, Cambridge, Eerdmans, pp.113-126.
- Julia Kristeva, Jean Vanier, 2011, *Leur regard perce nos ombres*, Paris, fayard.
- Jean Vanier, 1992; 1994; 1996, *A Network of Friends. The Letters of Jean Vanier to the Friends and Communities of L'Arche, vol.1-3*, John Sumarah (ed.), Lancelot Press, Hantsport, N.S.
- Jean Vanier, 1995, *L'Histoire de l'Arche. Des communautés à découvrir*, Novalis (Ottawa), Bayard Editions/Centurion (Paris).
- Jean Vanier, 2010, "What Have People with Learning Disabilities Taught Me?", in Reinders, pp.19-24.
- Jean Vanier avec François-Xavier Maigre, 2017, *Un cri se fait entendre. Mon chemin vers la paix*, Paris, Bayard.